

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月7日現在

機関番号：32686

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720270

研究課題名（和文） ルーン石碑の社会的機能に関する基礎的研究

研究課題名（英文） Basic research in social function of rune stones

研究代表者

小澤 実 (OZAWA MINORU)

立教大学・文学部・准教授

研究者番号：90467259

研究成果の概要（和文）：

本研究の成果は次の三点に要約される。第一にルーン石碑の歴史学的分析手法の確立とその精緻化である。ルーン文字のテキストならびにコンテキスト双方に注目し、石碑の社会的機能を抽出する分析手法が確立された。第二に以上の方法論に則ったルーン石碑の分析である。とりわけハーラル青歯王によるイェリング石碑が多様な視認者を意識して構築されたモニュメントであることが証明された。第三にあたらしい中世史像の構築である。紀元千年のスカンディナヴィア世界は周辺諸国さらにはロシア、イスラーム世界、ビザンツ世界といったユーラシア世界と交渉を行う政治体であることが提示された。

研究成果の概要（英文）：

Our research project reaches following three stages of suggestive conclusion. (1) establishment and refinement of a method of historical analysis of rune stones: the method tells us that the interrelationship between text of runes and context in which they were inscribed should be noticed to understand social function of rune stones (2) presentation of social function of rune stones by applying our new analytical method to the corpus: As an example the Jelling rune stone, which king Harald Bluetooth of Denmark had raised in memory of his parents in the middle of the 10<sup>th</sup> century, functioned as part of a monument which was constructed to various types of onlookers coming to Jelling palace (3) creation of a new vision of earlier Middle Ages: our study of rune stones showed us that Scandinavia around the year 1000 was a political and cultural crossroad which was not open only to its surrounded kingdoms but also far-stretching Eurasian world including Russian, Islamic and Byzantine cultures.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
総計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野：西洋中世史

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：ルーン石碑、スカンディナヴィア、中世

1. 研究開始当初の背景

従来の初期中世研究において、デンマーク、

ノルウェー、スウェーデンの三国からなるスカンディナヴィア世界は、「遅れた」地域と見なされる傾向があった。それに対し報告者は、ラテン語、古英語、古ノルド語による文献史料を駆使し、とりわけデンマークを分析対象としながら、スカンディナヴィア世界は、紀元千年前後のヨーロッパ世界において他の地域とは異なる独特の政治秩序を形成していたことを主張してきた。

しかしながらスウェーデンの歴史家ビルギット・ソーヤーによるモノグラフ (B. Sawyer, *The Viking Age Rune-Stones: Custom and Commemoration in Early Medieval Scandinavia*. Oxford 2000) は、報告者がこれまで採用していた文献史料による研究手法に再考を迫ることになった。報告者の関心において、本書の議論は2点において革新的であった。ひとつはルーン石碑とよばれる、この時代のスカンディナヴィアに特有のルーン文字という文字が刻まれた死者記念碑をひとつの歴史史料として歴史研究の俎上にのせたことである。もう一つはこのルーン石碑が、ただ単に死者の記念碑であるにとどまらない社会的役割を果たしていたことを明らかとした点である。彼女によれば、ルーン石碑は、そこに刻まれている死者が所有していたと考える土地の相続権を持つ生者が、その相続権を誇示するために競って建てたモニュメントであった。

しかしながら、報告者が目的とする、紀元千年前後におけるスカンディナヴィア世界の政治秩序の再現にとって、ソーヤーが用いた手法は、はなはだ不十分なデータしか提供しない。というのも、ソーヤーの研究は統計学的手法を用いたマクロな視点からの分析であり、個々の石碑がもつコンテキストの意味を捨象しているからである。

## 2. 研究の目的

報告者は、Rune stones create a political landscape: towards a methodology for the application of runology to Scandinavian political history in the late Viking Age: Part 1 & Part 2, *HERSETEC*, 1-1 (2007), pp. 43-62 & 2-1 (2008), pp. 65-85 において、1. 石碑に刻まれるルーン文字のテキスト、2. モノとしての石碑そのもの、3. 石碑の設置された場所、そして4. 石碑の設置された社会コンテキストという4つのポイントをおさえ、各石碑間の差異に注目し、政治的表徴としてのルーン石碑の分析手法の一端を明らかにしようとしている。このような基準に従って、各ルーン石碑のデータを蓄積していくことにより、テキスト類型別、地域別、時代別、規模別といった様々な観点から、ルーン石碑の特性を抽出することが可能となり、その石碑の建立に関わった在地有力者層の特徴をあぶりだすことができるようになると思われる。

## 3. 研究の方法

報告者は大きく三つの方向から研究を進めた。第一にルーン解読の方法論的再検討である。テキストとコンテキストの相互作用という観点から、従来の手法を脱構築化した報告者独自の分析手法の精緻化を目指した。第二に分析対象とする石碑のデータの収集である。第三にルーンが建立された歴史的環境に関わる研究である。これはつまり、紀元千年前後のスカンディナヴィア世界に関する歴史学的研究である。

2 で論じたように、報告者の模索するルーン石碑の分析手法は、その石碑がおかれたコンテキストを考慮したうえでその意味を判断しなければならないため、石碑ひとつひとつの分析にかなりの時間を要する。そこで報告者は、今回の研究課題において、分析対象とする石碑を、当時のデンマーク王国に限定

した。

#### 4. 研究成果

以下では報告者の研究成果を、三つに分けて提示したい。

##### (1) 方法論の精緻化

1で述べたように、報告者はすでにルーン石碑を建立者の政治的表徴と見なし、それを分析する方法論を確立しつつあったが、その最終的な報告を、[論文①]において詳細に試みた。ここではスカンディナヴィア独自の歴史史料であるルーン石碑の分析に関する方法論とその成果を、ただそれ自体で完結するものではなく、同時代の他の歴史史料全体の中に位置づけ、史料という観点から、スカンディナヴィア世界と他のヨーロッパ地域との相違点と相同点を明らかとした。このルーン石碑論と対をなすかたちで、[論文③と④]においては、当該時期のデンマークについて最も重要な情報を与えるとされてきた11世紀のラテン語史料『ハンブルク司教事績録』の再検討も進めた。その結果としてこの史料が主張するデンマーク王ゴーム老王がドイツ王に敗北したとする記述は、ハンブルク大司教座の意向を受けた『事績録』筆者による創作であり、この創作にも筆者の隠された政治的意図があることが明らかとなった。

##### (2) 個別分析

報告者は、デンマークの数多くの石碑の中でも、もっとも重要と思われるイエリング石碑の詳細な分析を進めた。その具体的な成果は、日本語論文で公表された後 [論文⑱]、さらに調査を進め、オスロで開催された第7回国際ルーン会議において全世界のルーン学者に対して報告することができた [論文⑳]。本論考においては、ハーラル青歯王によるイエリング石碑は、従来論じられていた

ように、単なる両親の死を想う記念碑ではなく、その石碑の視認者、つまりイエリング王族、デンマーク有力者層、スカンディナヴィア有力者層、そしてキリスト教ヨーロッパ世界からの来訪者という四つのタイプに対する、「デンマークを統一し、ノルウェーを支配し、デーン人をキリスト教徒となした」ハーラル自身の事績の誇示であるということであった。イエリング石碑の機能を同時代デンマーク王権の対外関係のなかに置き直すことで導き出した結論は欧米の研究史においては論じられてこなかった点であり、報告者のオリジナリティを担保するものであった。

##### (3) 歴史像の再構築

報告者は、ルーン石碑の史料論的研究を土台に据えることによって、紀元千年期のスカンディナヴィアを単純に辺境へと押し込める歴史像の再検討をはかった。それはとりわけ、大陸世界とスカンディナヴィア世界のコミュニケーションの作法に注目し、「先進」地域と理解されているカロリング世界やオットー朝ドイツと巧みな交渉をはかっていたことを論じた [論文⑳と㉑]、キエフ・ルーシの興隆期にスカンディナヴィア人が大きな役割を果たしていたことを強調した [論文㉒]、イングランドの支配者としてキリスト教文化を巧みに取り込もうとするクヌートの政策を整理した [論文㉓] により、実証的に論じられた。さらに報告者は、以上の成果を基盤として、スカンディナヴィア、そしてヨーロッパ半島をユーラシア史の一部として理解する歴史像の構築にもとりかかり、業績 [論文⑥、書籍①、②、③] において、巨視的なヨーロッパ史像を提示する準備を進めた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 19 件)

- ①小澤実「紀元千年期スカンディナヴィア史料論に向けて デンマーク・イェリング朝の事例より」岡崎敦編『西洋中世文書の史料論的研究 平成 23 年度研究成果年次報告書』(2012), 46-61 頁, 査読無
- ②小澤実「紀元千年期スカンディナヴィアにおける土地所有をめぐる一考察」『史苑』72-2, 2012, 95-105 頁, 査読有
- ③ Minoru Ozawa, Role of the Life of Archbishop Unni of Hamburg in the *Gesta Hammaburgensis ecclesiae pontificum*, Osamu Kano (ed.), *Configuration du text en histoire. Proce* (Global COE Program International Conference Series). Nagoya, 2012, pp. 29-39, 査読無
- ④小澤実『『ハンブルク司教事績録』における「ウンニ伝」の役割』加納修編『歴史におけるテキスト布置 「テキスト布置の解釈学的研究と教育」第 12 回国際研究集会報告書』(名古屋大学大学院文学研究科 2012), 171-179 頁, 査読無
- ⑤小澤実「第 7 回国際ルーン会議参加記」『北欧史研究』28, 2011, 48-54 頁, 査読無
- ⑥小澤実「エーコ、中世イタリア、そしてユーラシア世界」『UP』463, 2011, 25-30 頁, 査読無
- ⑦小澤実「Pierre Bauduin, *Le monde franc et les Vikings, VIIIe-Xe siecle* (L'evolution de l'humanite). Paris: Albin Michel 2009, 460 p.」『西洋中世研究』2, 2010, 187-188 頁, 査読無
- ⑧小澤実「Timothy Bolton, *The Empire of Cnut the Great. Conquest and the Consolidation of Power in Northern Europe in the Early Eleventh Century* (The Northern

World 40). Leiden: E. J. Brill 2009, 351 p.」『西洋中世研究』2, 2010, 188-189 頁, 査読無

⑨ Minoru Ozawa, King's rune stones. A catalogue with some remarks, *HERSETEC*, 4-1, 2010, pp. 29-42, 査読有

⑩小澤実「歴史学」るるぶ学問編集委員会・大久保一布編『るるぶ学問(文系編) これから学ぶ学問ガイドブック』(東京 2010), 28-35 頁, 査読無

⑪ Minoru Ozawa, In the shadow of the son: contextualising the Jelling rune stones, Preprint in the webpage of the 7th international symposium on runes and runic inscription "Runes in context", Oslo 2010, 査読有

⑫小澤実「堀越宏一『ものと技術の弁証法』(ヨーロッパの中世 5) 岩波書店 2009 年, viii+308+10 頁」『化学史研究』37-2, 2010, 74-77 頁, 査読有

⑬小澤実「キリスト教王となるヴァイキングクヌートの教会政策」『ヨーロピアン・グローバルゼーションと諸文化圏の変容 研究プロジェクト報告書・III』(東北学院大学オープン・リサーチ・センター 2010), 69-85 頁, 査読無

⑭小澤実「序：前近代の北西ユーラシア 越境研究と史料研究」小澤実編『シンポジウム「北西ユーラシア歴史空間の再構築 ロシア外部の史料を通じてみた前近代ロシア世界」報告書』(名古屋 2010), 7-11 頁, 査読無

⑮小澤実「ルーン石碑から見たスカンディナヴィア世界と東方世界との交渉」小澤実編『シンポジウム「北西ユーラシア歴史空間の再構築 ロシア外部の史料を通じてみた前近代ロシア世界」報告書』(名古屋 2010), 193-208 頁, 査読無

⑯ Minoru Ozawa, Community in voice? A reconsideration of the social context Danish royal charters functioned in the 11th century., *HERSETEC*, 3-1, 2009, pp. 65-76, 査読有

⑰ Minoru Ozawa, Scandinavian way of communication with the Carolingians and the Ottonians, Shoich Sato (ed.) , *Hermeneutique du texte d'histoire: orientation, interpretation et questions nouvelles* ( Global COE Program International Conference Series, No. 6) . Nagoya, 2009, pp. 65-75, 査読無

⑱ 小澤実「カロリング諸王とオットー朝皇帝に対するスカンディナヴィア人のコミュニケーション手法」佐藤彰一編『歴史テキストの解釈学 針路、解釈実践、新たな諸問題 「テキスト布置の解釈学的研究と教育」第6回国際研究集会報告書』(名古屋大学大学院文学研究科 2009) , 201-211 頁, 査読無

⑲ 小澤実「林立するルーン石碑のなかで イェリング石碑と「デンマーク」の誕生」『歴史学研究』859, 2009, 161-168 頁, 査読有

[学会発表] (計 14 件)

① Minoru OZAWA, Comment to a paper presented by Prof. Gunner Lind, from the viewpoint of medievalist, Workshop "state formation of early modern Denmark" in Kyoto, 13 March 2012, Kyoto University

② 小澤実「紀元千年期スカンディナヴィア史料論に向けて デンマーク・イェリング朝の事例より」シンポジウム「西洋中世史料論研究の射程」2011年12月17日, 九州大学

③ Minoru OZAWA, Role of the *Life of Archbishop Unni of Hamburg* in the *Gesta Hammaburgensis ecclesiae pontificum*, *Configuration du text en histoire*. Global

COE Programm: 12th International Conference, September 1 & 2, 2011, Nagoya University, Japan, 1 September 2011, Noyori Memorial Hall, University of Nagoya, Nagoya

④ 小澤実「バルト海から北海へ 紀元千年期デンマーク王権の婚姻政策」関西中世史研究会, 2011年7月9日, 京都大学

⑤ 小澤実「紀元千年期スカンディナヴィアにおける土地所有をめぐる諸問題」立教大学史学会「特集: 中世史研究の課題と方法」2011年7月2日, 立教大学池袋キャンパス

⑥ 小澤実「関哲行報告へのコメント」慶應義塾大学言語文化研究所公募研究「前近代の地中海世界における旅をめぐる知的営為と記述」公開シンポジウム「地中海世界の旅人たち 中世から近世へ」2010年11月27日, 慶應義塾大学

⑦ 小澤実「イェリング王朝のルーン石碑 ゴーム老王からクヌート王まで」北ヨーロッパ学会第9回研究大会, 2010年11月27日, 名古屋大学

⑧ Minoru OZAWA, In the shadow of the son: contextualising the Jelling rune stones, *Runes in Context*. The Seventh International Symposium on Runes and Runic Inscriptions, 9-14 August 2010, 12 August 2010, Oslo University, Oslo

⑨ 小澤実「キリスト教王となるヴァイキングクヌートの教会政策」東北学院大学オープン・リサーチ・センター公開シンポジウム「北海からアイリッシュ海へ ヴァイキングの軌跡」2010年3月13日, 東北学院大学

⑩ 小澤実「ルーン学の黎明 Olaus Wormius, *Danicorum monumentorum libri sex* (Hafniae 1643) の周辺」中世史・初期近代史ミニシンポジウム, 2009年11月8日, 東京大学

⑪ 小澤実「ルーン石碑から見たスカンディナ

ヴィア世界と東方世界との交渉」北海道大学  
スラブ研究センター共同利用・共同研究拠点  
公募プログラム・シンポジウム「北西ユーラ  
シア歴史空間の再構築 ロシア外部の史料  
を通じてみた前近代ロシア世界」, 2009 年  
11 月 1 日, 北海道大学スラブ研究センター

⑫小澤実「前近代の北西ユーラシア 越境研  
究と史料研究」シンポジウム「北西ユーラシ  
ア歴史空間の再構築 ロシア外部の史料を  
通じてみた前近代ロシア世界」, 2009 年 10  
月 31 日, 北海道大学スラブ研究センター

⑬小澤実「船を通じた共同体 紀元千年前後  
スカンディナヴィア世界における共同体形  
成に関する一試論」第 59 回日本西洋史学会,  
2009 年 6 月 14 日, 専修大学

⑭小澤実「林立するルーン石碑のなかで  
イェリング石碑と「デンマーク」の誕生」  
2009 年度歴史学研究会大会, 2009 年 5 月  
24 日, 中央大学

〔図書〕(計 4 件)

①金沢百枝・小澤実『イタリア古寺巡礼 フ  
ィレンツェーアッシジ』新潮社, 2011 年, 126  
頁 (うち半分を執筆)

②金沢百枝・小澤実『イタリア古寺巡礼 ミ  
ラノーヴェネツィア』新潮社, 2010 年, 160  
頁 (うち半分を執筆)

③小澤実編『北海道大学スラブ研究センター  
共同利用・共同研究拠点公募プログラム・シ  
ンポジウム「北西ユーラシア歴史空間の再構  
築 ロシア外部の史料を通じてみた前近代  
ロシア世界」報告書』名古屋(私家版), 2010  
年, 306 頁

④村井誠人編『デンマークを知るための 68  
章』明石書店, 2009 年 7 月, 416 頁 (第 20  
章「デンマークのヴァイキング時代」, 第 21  
章「デンマーク初期国王列伝」を担当)

〔その他〕  
ホームページ等

<http://www009.upp.so-net.ne.jp/m-ozawa/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

小澤 実 (OZAWA MINORU)  
立教大学・文学部・准教授  
研究者番号：90467259

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし